亡母（はは）のことなど

山北　厚

私の亡き母はえらかったなぁ、と今ごろになってつくづくそれを感じる。

脳性マヒで障害程度がかなり重く、しかも一人っ子であった私が、たいていならば、甘やかされ手をかけられ過ぎて、何事にもひとの助けを借りなければならないような、ダメな人間になっていたかもしれないであろうところを、とにかく、一人になっても困らないだけの事ができるようになったのは、一つには亡母（はは）の「きびしさ」によるところが大きいのではないかと思う。

「一人でやってごらんなさい」「ひとを頼りなさんな」というのが、亡母の口ぐせであった。小さいころ私が何かがなかなか出来ないで半ベソをかきながら、それを亡母にやってくれと頼んでも「出来るまでやってごらんなさい」と突っぱねられたもので、そんなときは「ちょっとやってくれりゃいいのに、なんでやってくれないんだ」と子供心に亡母をにくらしく思ったものだった。だがその代り？「早くしなさい」と急がさせられるようなことをいわれた事は、殆んどなかった。

祖母（祖母ももう過去の人だが）などは、私が何かがなかなか出来ないでいると、可哀そうという気持ちと、じれったいという気持ちとで、どうしても手伝ってくれてしまうのだったが、そのことで亡母と祖母の、いわゆる嫁と姑の口喧嘩が時々あったのを微かに覚えている。そしてその亡母の「きびしさ」は身体的な面だけではなく、精神的な面でもそうであった。

昭和の十四、五年のことで、当時としては当然の事ながら公立の小学校へ入学を拒否された私は、幼稚園の先生に紹介されて特別に入れてもらった（学齢に一年おくれて）、電車を一度乗りかえて一時間ほど掛かる私立小学校へ、その学校の近くへ引越すまでの約一年間を祖母の付き添いで通ったのだが、その通学途中で他の小学校の生徒たちが私の後からはやしたてたり、私の歩く恰好を真似したりしながら付いて来る事があったが、祖母にはそれがとてもつらく、たまらない事であったのであろう、亡母に「学校へ通わせるのは可哀そうだ」とでも祖母がいったのだろうか、「はやしたてられてもかまいません」とか「可哀そうですから学校へ付き添って行きません」とかということで、祖母と亡母の間でかなり激しいいい争いがあったことを記憶している。

強情っ張りで意地っ張りのくせに内気で気の小さい性格であった私は、そのためかちょっといやな事があるとそれから逃げようとしたのだが、幼稚園へ行っていたときのこと、今おもればささいなつまらない事があっていやになり、その翌日ズル休みをきめこんだもので、亡母から、そんな意気地なしでどうするのですッ、とそれまでになくこっぴどく叱られた。そしてその時に亡母がいった次のような言葉をいまだにはっきり覚えている。「学校へあがったらこんなズル休みは絶対に許しません」と……が、小学校一、二年の時はズル休みをするようないやな事もなかったが、三、四年のころになると軍事教練まがいの事が多くなり、それが皆と同じように出来ない事が私にはつらくいやな事で、しばしばズル休みをしたのだったが、その度に亡母からひどく叱られ、時には一晩外に出されていたことがあった。

もの心がついて、自分の歩く恰好がひととは違っているのを自覚し始めたころ、私は亡母と外出すると、どうしても亡母の後から隠れるようにして歩いてしまうのだったが、そんな私に亡母は「後を歩かないで、わたしの前を歩きなさい」「下ばっかり見ていないで、胸を張って上の方を見ながら堂々と歩きなさい」と云

い云いしたものだ。そのためかどうか分らないが、いまの私は家族や他人の心配を他所に道の真中を堂々？と歩くくせがある。

一人で何でもやれるようにする、という考えと同じところから出ている考えだと思うが、亡母は私が「やりたい」ということは何でもやらせてくれた。小学校にあがる前のことだったと思うが、私が「毛筆と墨でものを書きたい」と云い出したことがあった。祖母は私が墨なんか使ったらそこいら中墨だらけにして仕様がないだろうと云うし、父は私が筆でなんか書けるはずがないと、てんでもんだいにしなかったのだが、亡母は早速に私専用の毛筆を買って来てくれたのだった。また、普通ならば〝危い〟からとやらせてくれないような事、たとえば鋭い刃物を使うというような事もどんどんやらさせてくれた。

幼い日のことで、いまだに残念に思っていることの一つに、三輪車を買ってもらえなかった事がある。もっとも数え年七つまで一人では歩けなかったので、一人で歩けるようになり外へ遊びに出るようになってから三輪車を欲しいと思ったわけで、三輪車に乗るにはいささか体が大きくなり過ぎていたのだが。亡母は私の体の大きさに合う三輪車を探して買ってやりたいと思ったらしいのだが、父に反対されてだめになったのであった。

父が三輪車を買うのを反対した理由は、表向きは、私がもう三輪車に乗って遊ぶような年令ではない、ということであったが本音は、私が三輪車に乗れっこないから買っても無駄だ、ということでであったようだ。

父は、父方の祖先が旗本であったそうで、その武家社会の習わしを受けついだのだろうか、（まあ、一般的に昔の男性はそのようであったが）、男子は家事に手を出すべからずという風で、家事にはまったく疎く、私の育児教育も実質的には亡母まかせであった。であるから、私の身体障害の状態について父はよく知らず、実際よりも悪く見ていたのではないかと思う。

私はなんということはないが、台所で亡母が料理するのを見ているのが好きだった。その事で父が「男が台所に入り込んでいるものじゃない。厚を台所に入れないようにしなさいッ。」と怒っていたが、亡母は「男だってお父さんみたいに食べ物のことが何も分らなくっちゃ困りますよ」と云って、食べ物の材料の事、料理方法等をあれやこれやと教えてくれたのだった。そのお蔭で、一人で生活しなければならなくなったとしても、食べる事で困らない自信を持つことが出来た。そして、十年ほど前に約半年間一人で暮していた時も、インスタント食品ばかりに頼ることなく、生の材料を自分で加工して食事することが出来たのであった。

父が家の中の事や育児等に殆んど手を出さなかったのは、前述のように〝昔かたぎ〟であったことばかりでなく、亡母の病院通いや私の治療のための出費、あるいは私の通学の便のために私が入った小学校の近くに家を建てる費用等を稼ぐのに忙しく、家の雑事や子どもの教育にまで関っていられなかった、ということがあるかもしれない。

とにかく、私の父のイメージは、真面目で几帳面で何時も書斎で物を書いている人、ということである。会社から帰ると二、三合の晩酌をゆっくり飲んでから書斎に引きこもるというのが、私の小さい頃の父の日課だった。休日もほとんど書斎にこもりっぱなしであったが、仕事が時たま隙になると、今で云う日曜大工のような事をしたり、まだよく歩けない私のために乳母車持参で近郊へピクニックに私を連れて行ってくれたりした。

私が父から本当に怒られたという記憶は二回ある。その一回目は、小学校時代に一週間続けてズル休みしたときであった。そのとき私はたしか「昔は学校なんかなくて、みんな家で勉強していたじゃないか。学校へ行かなくったって、家で勉強すればいいじゃないか。」というような屁理窟を云って亡母を手こずらせたのだった。二回目は、私が大学進学のこと等でグレていた時のことで、その時生れて初めて父から頬を打たれたのだった。そしてその時は、私は頬を打たれた勢いで家をとび出し、三日間放浪した

あげく面倒くさくなって自殺を計ったのだったが……。

考えてみると父は、私のための余計な出費のために人一倍働きずめだったような気がする。ただ単に障害者故の余分な出費ばかりでなく、ふりかえってみると私は、父に大分無駄なお金を使わせたように思う。そしていまだに、生活費の半分近くを父から援助してもらっているのだが、既に七十才を過ぎた父のことを考えると気の毒になり、「何とかしなければ……」と思うのであるが……。

でも、勝手な云い草かもしれないが、私の方の生活費の面倒もみなければならないと思うからこそ、父は今でも仕事をし若さを保っているのではないかと思うのである。いわば、私の障害が父の生甲斐になっている。ということである。これでもしも私がじゃんじゃん稼ぐことが出来ていたとしたら、父はもっとふけ込んでいたのではないだろうか。　こういうことを云うのは、父を気の毒だと思う気持をごまかさなければいられないからかもしれない。

父は、いわゆる〝専門馬鹿〟というのだろうか、世間的な事に疎く、社交的な人間とはいえない。それで亡母は私に「いろんな事を知っていなければ困りますよ」とか「社交性を身につけるようにしなさい」というような注告をよくし、「いろいろ見聞しておくのは大切な事だから」と、子ども向の演劇、上野の美術館を始めとして宝塚少女歌劇、歌舞伎、各種の博物館等々へ連れて行ってくれた。そのお蔭で、私程度の身障者としては割合いと実際に見聞して得た知識が多く、また、社会一般の雑学に興味を持つようになったのだろう。だが社交性については、父の性格を受け継いでしまったらしく、身につかなかったようだ。

亡母が亡くなったのは私が二十四の時だったが、始めの方で書いたように亡母が私を早くから、一人になっても困らないように訓練し仕附けたのは、亡母自身が早く死ぬことを予感していたからかもしれない。

先に「亡母の病院通い」ということをちょっと云ったが、亡母には他人に知られたくない傷があったのである。そのことについてここに書くかどうか迷ったのだが、私とも関わりのある事なので、あえて書くことにする。

その傷というのは、ウエストと尾骶骨の間に十五センチ四方ぐらいの四角い火傷様のもので、そこはケロイドになっていて、常にじゅくじゅくと水の様な物がしみ出ていた。

そんな傷がどうして出来たのか亡母は亡くなるまで話さなかったし、私も原因をきいては悪いような気がし、又、こわいような気もして亡母にも父にもきかなかったのだが、亡母の亡なった後に親戚の人の話しから、その原因について恐るべき事を知ったのであった。

私は元々一人っ子ではなく、私が二才ぐらいの時に弟が生れた。その弟は生れて半年ぐらいで死んでしまったのだが、どうもその弟もいわゆる異常児であったらしい。私の遠くかすかな記憶の中に、家に終日泣いている赤ん坊がしばらくいた、ということがある。それで、そのためか如何か確かでないが、とにかく子供はもういらないということで子供が出来ないようにすることになったのだが、昭和十年ごろは避妊をするなんてとんでもない事で、もしそれが知れたら警察沙汰になる時代であり、もちろん避妊のための道具や薬があるはずがなかった。そこで、卵巣にレントゲン線を照射してその機能を破壊する避妊術を内証でやっている所を知人から聞き、その術を亡母は受けたのであったが、その時にレントゲン線を照射され過ぎたために四角い火傷様の傷が出来たというのである。

今の様々な知識から考えると、まったく無茶というか無謀といおうか恐しい事をしたものである。

結局、亡母のその傷は放射線によるものであり、原爆による火傷と同じものだったように思う。そして、亡母はガンで亡くなっ

たのであるが、原爆の被爆者がガンになりやすいという事や、原爆症の人と同じように白血球が異常に多くなっていたという事等を考え合せると、亡母の死の遠因はレントゲンによる放射能障害であり、そのまた先の、避妊しなければならなかったというところにあると思うのである。

というわけで、もし私が普通の子であったなら、亡母もそのような避妊術を受けるなどという考えを起すことなく、従って早死するようなこともなかったのではないかと思わずにいられない。いってみれば、私が障害を持っていたが故に亡母は生命を縮めたのかもしれない。　いまさらこんな事を云っても詮ないことだが……。

このような十字架を背負っていた亡母に対して、いわゆる思春期の時代に私はずい分と反抗した。それはやはり一人っ子故のわがままからだったかもしれないし、また、亡母が私に自立心をつけるために厳しく、手をかけないようにしたとしても一人っ子であるためにどうしても何や彼やと干渉してくることが多く、それが私には煩わしかったのかもしれない。それはともかく、親に対して反抗することは、障害者には必要なことでありプラスになることではないかと私は思う（もっとも、反抗してもご無理ごもっともご機嫌をとるような親ではだめだが）。というのは、私自身小さい時から自分のことは自分でするように厳しく仕附けられていても、どこかに依頼心があり、精神的にも亡母にべったりくっついていたのだが、反抗した以上何かをやってくれ等と頼むのはしゃくにさわるわけで、必然的に依頼心を捨てて自発的に全て自分でやろうとするようになり、親を突き放して見るようになって精神的乳離れをしたように思えるからであり、また、そういうことによって、自分自身にある程度「一人になっても困らないぞ」という自信を得ることができたからである。

余談ではあるが、いまの身障児は親やその他から必要以上に手をかけられ過ぎ、甘やかされている者が多いように私には感じられる（一般的にも子供が過保護になって来ているが）のだが、そのために、何かやってもらうのを当りまえと考えるようになり、やってもらうことに対して感謝することを忘れているように思うし、また、自己中心的な考え方が社会でも通ると思い込んでいるように見受けられる。そして更に、過保護にされているために「なにくそっ」という反骨精神が稀薄で、ひよわな人間にされているような気がするし、従って親に猛烈に反抗するということもないのではないかと思うのである。

身障児も普通児と同じに精神発達をするように育てられるべきだし、そうしなければ成人してから一個の市民として一般社会の中で生きて行くのは難しいのではないだろうか。そのためには肉体の障害から来る精神的甘えを戒め、精神的には厳しく仕附けることが必要なように思うし、そうする事によって反撥心が生まれ、強い精神力が作られるのではないかと思うのである。

余談はさておき、とかく親という者はその子を客観的に見られないものだが、私の場合は、父は前述のように私の障害を実際より重く考えていたようだし、亡母は反対に、希望的観測からか、実際より軽く見ていたようだ。（もっとも私自身、脳性マヒであるためか、自分の障害がどの程度のものなのか判断できないのだが。）そのために私は損もしたし、苦労もしたように思う。

父は私が中学生のころに会社勤めを辞めて、宣伝用の動く展示物等を作る小さな工場を始めたのだが、その工場での仕事を一度も私に手伝わそうとしなかった。私が模型の機関車等を作れるのを知っていながら父は、頭っから私には寸法通り正確に穴をあけたり切ったり等出来っこないときめてかかっていたようだ。私の方も、へたに手を出したらおこられそうな気がし、他の理由もあって手伝おうという気にならなかったのだが、父の仕事を手伝っていたら私ももう少しなんとかなっていたのではないかと思うのである。

このように障害を実際より重く見られるのも困るが、必要以上に障害を軽く見られるのも困るのである。ある程度障害を軽く見て何かをやらせることは障害を克服する上で必要なことであるが、それにも限界があるわけで、必要以上に障害を軽く見られ過度の期待をかけられると、それが精神的負担になっていじけてしまったり、耐えられなくなったりするように思う。私もいわゆるハイ・ティーンの時代に亡母から過度の期待をかけられ、そのことが重荷となって必要以上に反抗をし、グレたのではないかと思うのである。

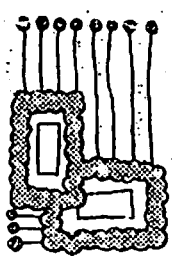
ついでのことに云うが、身障者自身とかく自分の障害程度を軽く見るようとし、また、他人に軽く見せようとして、そのために自分の体の限界以上に体を無理に動かそうとし、あげくの果に体の状態を悪くしてしまうケースがよくあるが、そのような事にならないようにするためにも、自分の障害についてよく知っているようにすることが必要だと思うのである。

最後に、特に障害があるからということではなしに、私が父母等から受けた教訓の幾つかを紹介しようと思う。

父からは、〃時間は正確に〃ということと〃同じことを何回もくり返して云ったり聞いたりするな〃ということである。この〃同じことをくり返して……、ということで亡母は、大方の女性の常でうっかり同じことを話したりすると「それはもう聞いた」と父からぴしゃっと云われて、大分苦労したようだ。しかし、くり返すなということは一度聞いたことを忘れるなということであって、ノートやメモをとることが苦手な私には良い教えであった。

亡母からはいろいろとあるが、〃他人が何かやっているとき、それがどんなにつまらない事をやっているように見えても、じゃまをしてはいけない〃ということ、〃どんな細いな事でも約束した事は守らなければいけない〃病気になるのは自分の不注意だ〃ということが特に私の頭に残っている。

祖母から得た教訓は〃何でも考えなしにしなさんな〃ということと、〃自分が他人からされていやな事は他人にするな〃ということ、そして〃待たせるより待つ身になれ〃ということであった。この〃待たせるより待つ身になれ〃ということは、名前は忘れてしまったが某有名人が「他人の時間を盗む（無駄使いさせる）奴は死刑に価いする」と云ったのと同じ意味合いであろうと思う。

以　上

（昭和五十二年一月記）